

『みんなのスポーツ』12月号 (No.499) から学ぶ

林 但

平素より協議会の活動にご理解をいただきありがとうございます。

表記、公益社団法人 全国スポーツ推進委員連合機関誌の12月号は「**運動部活動の地域移行と総合型クラブ**」の特集号です。

私の視点で気づいたこと・感じた事、参考になる点を3点記載します。



- (1) **質問玉手箱** 次期のスポーツ推進委員が見つからないですが・・・1ページ目にあるこの記事を読んでふたつのことに気がかかります。ひとつはスポーツ推進委員がH10年ころは全国に62,000人が20年後には50,000人程度に減少。

「引き受けてくれる人が少ない」と回答している自治体は71%という数字にびっくり。2点目は、東京都のある区で調査した、スポーツ推進委員の「名前も活動も知っている」と回答した人は区民の3%でした。認知度を上げることは容易なことではありません。スポーツ推進委員がかかわっている事業の見直しが重要。スポーツ推進委員が住民の健康づくりやスポーツを「支える」存在であることを通じて、認知度を高めるために、市や地域の組織や団体、住民とのコミュニケーションを創り上げる時間と忍耐が必要といわれる部分には全く同感です。色々な団体と連携を取りながら住民の方にできることから取り組んでいくことが大切と感じています。

- (2) **スポ推コラボ通信** 信じられますか？ モルックやポッチャをするために「図書館」に行列！の記事を読んでびっくり。表紙も図書館でポッチャやモルックの場面が掲載されている。山形県酒田市では図書館が駅前交流拠点施設「ミライニ」に移転開館することが決まっていたため、それに伴い、「図書館×スポーツ」をテーマに(株)図書館流通センター（指定管理者）と連携・協力し、図書館利用者の運動実施率向上を図るべく、「ニュースースポーツ体験会」を開催。

酒田市でこれまでは、各地区でニュースースポーツ体験会を開催してきたが、コロナ禍もあってなかなか人が集まらない、いろいろな課題も抱えていた。R4年9月より毎月1回のペースで、モルックやポッチャを開催、今では行列ができるほどの人気であまりの反響に戸惑いつつも喜んでいる。

図書館：静、スポーツ：動という真逆の組み合わせという“逆転の発想”に目からうろこが落ちました。特に小さい子供がもう1回もう1回とせがむ。その子が保護者や祖父母を引き連れてきてリピーターになっているとの事。こういう考え方はあるなと感じています、今年10月～11月にかけて市内の学区ごとの健民運動会や他の行事を見ていて同じようなことを感じる場面がありました。

- (3) **パラスポーツを学ぶ3** 共生社会実現に向けて 京都市の記事の読んでいて、横須賀市スポーツ推進協議会では障がいのある方に対する行事や研修は行っていない。しかし、学区では毎年6月初めに、「ふれあい福祉フェスティバル」を数十年に渡って行っている。音楽を聴く・楽しむ、ダンス、軽スポーツ他をみんなで行っている。理由は定かでないが、地域には関連する学校や施設があることと推察している。地域の色々な団体と連携しながらみんなでこの日は楽しんでいる。私は本冊子を読んでいて、「障がいのある人」と捉える、見るのではなく、同じスポーツを

する人と見てください。その上で、一緒に楽しむ姿勢を持ってほしい。できないことがあればどうすればできるかについても考えて欲しい。一人で身体を動かしにくい方には一緒に動く人が増えることを望まれていると書かれている。社会の色々な場面で改めて考えるとともにできることから行っていきたいと感じました。

今月号では3つの事に記載致しました、知っていることが多いと思う方もあるかもしれませんが、気づいたことでできることから始めて（行動）みませんか？

* **本冊子は有益で私たちの活動のヒントや答えがある**ように私は思います。年間購読されなかった方は、個別にも購入はできますので一度読んでみてください。問題意識や感度を高めていくと紹介されている事例が使える場合とこのままでは使えないがこうすればできる。こんな方法もあるなど感ずると思います。是非一緒に取り組んでいきましょう！

以上

<おまけ>以前にも掲載しましたがもう一度。

